

5 まとめ

本報告書のとりまとめ結果をうけ、検討委員会の場で以下のような議論がなされた。

5.1 暴露量のとりまとめ結果について

暴露量をとりまとめ、公表するにあたっては、それらの数値が健康影響の観点からどのような意味をもつものかを明確に示せる必要があるとの指摘がなされた。特にリスクの大きさをはっきり示すものとして小児白血病における超低周波磁界暴露の Attributable fraction の算出、およびその公表の意義が論じられた。

また、報告書の公表に当たっては、報告書に記載された測定値の数字だけが一人歩きをすることがないように、また、基準値と数値の大きさだけが比較され、根拠のない不安をあおることがないように、十分な予防措置をとるよう、厳重に指摘された。具体的な措置としては、測定する周波数域や距離によって、磁界レベルの数値が大きく変動するため、数値だけを単純に比較することが無意味であることを繰り返し伝えること、また、それぞれの数値には、大きさとともに、どのような測定条件で得られた数値であるのかを明記するよう要望が出された。

さらに、現時点では、企業などの提供する情報を除き、生活環境における磁界暴露と健康に関する情報提供のないことが指摘され、関係省庁のホームページ等、公的で、公正感、信頼感の持たれる場において、一般市民向けの情報提供を行っていくことの重要性が指摘された。単に報告書を公開するだけでなく、専門的な調査内容を市民に分かりやすく伝えられるよう、ホームページや小冊子等の作成等の工夫をすることが求められた。

5.2 今後の研究課題について

検討会の場では、国内の生活環境における超低周波（50 Hz/60 Hz）磁界暴露に関してのとりまとめが完成したことを受けて、今後の研究の方向性として以下のような示唆が得られた。

- 新しい磁界暴露源の調査

生活環境中には、リニアモーターカーやハイブリッドカー、電気自動車などに見られるように、今までとは異なる技術や方式による新しい磁界暴露源が出現してきているし、これからも出現し続けると思われる。これらからの暴露の特性を把握しておく必要がある。

- 生活環境中の電界、あるいは超低周波以外の磁界暴露調査

本調査は超低周波磁界暴露を対象として行われた。しかし、環境中からの磁界暴露は、この帯域に限って生じている訳ではない。また、磁界だけではなく、電界への暴露も同時に生じている。今後は、今回調査のなされていない周波数帯域の磁界、あるいは電界を対象とした暴露情報のとりまとめが必要かもしれない。

- 正しい情報と的確なリスク感の伝達

例えば、携帯電話からの電波によって心臓ペースメーカーに誤動作が生じるなど、現実

に悪影響が生じる危険はごく小さいものと考えられる。しかし、ペースメーカーの機種によって、電話機の使用状況によって、あるいは新たな通信機器や通信方式の導入等によって、思いがけない影響が出てくる可能性も否定できない。健康の状況も生活上の要求もさまざまに異なる市民が等しく安心して共存できる社会を構築するためには、最新の科学情報を収集するとともに、情報をいかに提供するか、どのようにルールをつくるか等の手法について、きちんと考察、整理し、実行につなげていく必要がある。

- リスクコミュニケーション手段の開発とその有効性の検証

5.1 にも記載したとおり、検討会においては報告書の内容を一般市民に分かりやすく伝える工夫が求められた。しかし、それを行うにあたって、科学的な正確さが犠牲にされてはいけないとの指摘がなされた。そのためには、磁界暴露と健康影響の専門家が中心となり、リスクコミュニケーション、ホームページやインタラクティブ学習ツール作成の専門家等と協力し、情報提供の仕組みを開発していく必要があるだろう。開発にあたって、随時、利用者の理解度を調査し、結果をフィードバックしていくことで、よりよいリスクコミュニケーションのツールが得られるものと考えられる。

